

第21回 作品募集

ダイワハウス コンペティション

あなたにとって、夢の素材でできる家とはどのようなものでしょうか。もしくは、多くの人びとにとって、夢の素材とはどのようなものでしょうか。これが今回のテーマです。

建築はこれまで、それぞれの時代で扱うことのできる素材によって成立し、さまざまな制約のもとで空間やかたちを編み上げてきました。同時に、素材の選択や特性は、人の感覚や行為を導き、暮らしのあり方そのものを規定してきたともいえるでしょう。

夢の素材とは、これから生まれる技術によって可能になる未知の高性能材料かもしれないし、まだ存在しないものを自ら定義することによって生まれるものもあるでしょう。あるいは、歴史的に使われていた素材を現代に転換する発想や、これまで見過ごされてきたり捨てられてきたものへの価値の再発見かもしれません。重要なのは、**その素材がどのような特性をもち、なぜそれを選び、それによってどのような空間や経験が生まれるのか**を具体的に示すことです。

一方で、近年のアイデアコンペティションの提案には、概念が先行し、建築としての実体が伴わないまま語られてしまうことも少なくありません。そこで本テーマでは、**素材という具体的な起点から思考を立ち上げ、それがどのような空間やかたちとして現れるのか**を伴った提案を求めます。

夢とは、現実から乖離した幻想ではなく、現実新たな視点をもたらす契機ということです。素材を手がかりに、その可能性を引き出すことで、そこから生まれるこれからの暮らしの豊かさを具体的に構想してください。

敷地は架空でもリアルでも自由です。戸建て住宅や集合住宅、併用住宅、リノベーションなど、形式やプログラムは問いませんが、ひとつの家として必要な空間を提案してください。夢の素材が何であるかを明確にし、その選択理由とそこから生まれる価値を示しながら、建築の楽しさと明るい未来を感じさせる提案を期待します。

登録・作品提出締切

2026.10.14 (wed)

消印有効

| 審査委員 |

審査委員長

青木 淳

建築家
AS

小堀 哲夫

建築家
小堀哲夫建築設計事務所
法政大学教授

審査委員

堀部 安嗣

建築家
堀部安嗣建築設計事務所
放送大学教授

森角 義宗

大和ハウス工業
上席執行役員

平田 晃久

建築家
平田晃久建築設計事務所
京都大学教授

八田 哲男

大和ハウス工業
執行役員

でできる家 素材の 夢の

第21回よりリニューアル

・受賞17作品の展示会を開催

・2次審査をポスターセッションに変更



| 賞金 |

最優秀賞 (1点) 優秀賞 (2点)
200万円 および記念品 各30万円 および記念品

入選 (4点)
各10万円 および記念品
(以上、1次審査通過7作品)

大和ハウス工業賞 (1点)
30万円 および記念品
(1次審査通過7作品より1作品選出)

佳作 (10点) ハートフル賞 (1点)
各5万円 記念品
※すべて税込み

・大和ハウス工業賞は1次審査通過7作品の中から、公開2次審査のポスターセッションを通して、審査委員とは独立した形で大和ハウス工業が1作品選出する賞。最優秀賞、優秀賞、入選の中から選ばれるので、たとえば、最優秀賞がさらに大和ハウス工業賞に選ばれた場合、230万円の賞金が授与されます。
・2次審査のポスターセッションの内容によっては、審査委員の判断で上記賞金金額の配分を変える場合があります。
・ハートフル賞は佳作を含めた17作品の中から、展示会をご覧いただいた方と公開2次審査に来られた方の投票により決定します。

「夢の素材でできる家」を考える



座談風景。左から、小堀氏、平田氏、堀部氏、青木氏、森角氏、八田氏。

建築の明るい未来を具体的に創造する

八田 ダイワハウスコンペティションは昨年第20回という節目の年を迎えました。このタイミングで心機一転、今までの審査方法やテーマを見直して、より発展性のあるコンペにしたいと思います。今回は「帰りたい家」というテーマでしたが、全体的に明るさがない提案が目立ち、具体的な家のあり方が示されず、思想とかたちの相互関係が読み取れない案も少なからず見られました。今回は建築の明るい未来に向けての具体的な提案が集まるテーマを目指し、応募者と審査委員の議論が弾むコンペにしたいと思います。

司会 前回までを振り返ったうえで、テーマの方向性や2次審査の形式を考えたいと思います。今回はどのようなコンペになることを期待しますか。

小堀 これまでにこのコンペの2次審査で取り上げた案は暗いものばかりではなく、レベルも決して低くないです。一方で、言葉や抽象的なイメージを印象付けて、どのような空間を設計しているかは審査委員側の想像に委ねている提案が多い傾向はあります。もし提案が明るくなかったと感ずるのであれば、テーマにもっとわれわれのメッセージを込めることと、2次審査会場の雰囲気や審査の形式を見直してもよいかもしれません。この議論をきっかけに、アイデアコンペのあり方がより前に向かっていく方向性を探っていけるとよいですね。

森角 私たちはこのコンペの開催を通して次世代に挑戦の場を提供し、建築業界を盛り上げていきたいという想いがあります。応募者にとっては、著名な建築家の方々と自らの提案に対して議論したいという目標もあると思います。一方で、これまでの公開プレゼンテーションの形式では、審査する側・される側という構図が強く、特に応募者の多くを占める学生の方々にとっては構えてしまうので、本来の対話が生まれにくいのではないのでしょうか。

青木 その通りでしょうね。たとえば、1次審査通過者がそれぞれブースを設け、審査委員はそこをひとつひとつ回るようなポスターセッションの形式で公開2次審査を行うのはどうでしょうか。ポスターセッションは前回

座談会参加

青木 淳 (建築家 AS)

堀部安嗣 (建築家 堀部安嗣建築設計事務所
放送大学教授)

平田晃久 (建築家 平田晃久建築設計事務所
京都大学教授)

小堀哲夫 (建築家 小堀哲夫建築設計事務所
法政大学教授)

森角義宗 (大和ハウス工業 上席執行役員)

八田哲男 (大和ハウス工業 執行役員)

までのプレゼンテーション形式に比べ、よりフラットに話ができ、審査委員にとっても疑問に思ったことをすぐに聞けるという利点があります。コンペなので賞を決めなければならないのですが、本来は2者間で議論を深め、応募者と審査委員のレベルを上げる場になることが重要です。昨年は最優秀にふさわしい提案がありませんでした。それは、1次審査通過案に八田さんや小堀さんが指摘されたように、観念的な部分にとどまる提案が多かったためです。提案自体は面白く発展性もあり、独自の考えも見られましたが、それが建築という実体へと落とし込まれていないといけません。ここ数年のテーマはあえて抽象的にして、広い解釈を可能にすることで参加者の門戸を開いたのですが、一方で思考が先行してかたちの議論まで行き着いていないものも散見されました。設計の楽しさにも触れるような、具体的なかたちへと思考が喚起されるテーマを見つけられればと思います。

堀部 これまで1次審査で取り上げたり、最優秀に選んだ提案は、革新的であるところを高く評価し、現実的であるかや技術的であるかはあまり評価していませんでした。アイデアコンペであっても評価のベクトルを見直していく段階なのかもしれません。提案の方向性が革新的でも保守的でも、現実的で、技術的で、科学的であることも重要です。技術や科学を深く知ろうとすれば、若い人たちは建築に新たな側面を見出すと思います。評価の方向性を示し、科学と建築の楽しさを共有できるようなテーマにしたいです。

平田 このコンペに限らず、建築のアイデアコンペの形式は僕が学生だった30年前頃から基本的には変わっていません。現実の厳しく細かい制約をすべて取り払った中で、何で勝負するのかを応募者に委ねるといういわゆるアイデアコンペ特有の前提に疑問を投げかけてもよいのかもしれませんが、ある程度制限した枠組みの中で生まれたアイデアがこの先の課題や実務にも活かされ、新しい建築が生まれていくというアイデアコンペのあり方も考えられるかもしれません。現実には起きている問題の中から共有可能なテーマを見出し、建築で乗り越えるような提案を募ることができれば、具体的かつ創造的な機会になるのではないかと思います。



アイデアとリアリティのバランス

平田 しかしながら、どの分野でも革新的な運動は非現実的に見える発想からやってくることも少なくありません。未来の可能性を提示したものは、現時点では非現実的に見えるかもしれませんが、哲学的にはそれぞれが現実というものなのかもしれませんよね。アイデアコンペであれば、非現実と現実の狭間にある提案が出てくると面白いと思います。



堀部 一方で提案のリアリティについては、毎回審査で議論に上がりますよね。たとえばこの敷地にその建物が本当に建つのかといった現実的な視点をわれわれは応募者に求めていると思います。青木 よい議論をするためには審査委員と応募者が程度同じ方向を向いていることが必要です。そこで、提案の方向性を絞るフレームを設けるのはどうでしょうか。たとえば、まったく同じかたちのモデルハウスが10軒あるとして、その集まり方や配置を問うというようなフレームとか。

八田 どのような評価軸で審査するのか、前もって提示するだけでも提案の傾向は変わってくると思います。われわれが何を考えて審査しているかがしっかり伝われば現実性に対する解像度も上がるはず。テーマはその時代に都合合うものを出していくのがよいと思います。

森角 テーマとは別にサブテーマを設け、それに基づいて審査する方法もあると思います。

堀部 やはり模型の制作など物理的なものや空間を通して、科学的かつ技術的な視点をもって提案してもらうことが重要だと思います。応募者も自分の案が科学的に成立するのを知りたいはずなので、それをわれわれと考える場になればよいと思います。たとえばそれぞれが工務店の社長の立場になって、その会社のモデルハウスをつくるというのはどうでしょうか。それが時代にあってるか、そして商品として成立して売れなければ会社が潰れてしまうという状況であれば、切実な現実に向かい合わざるを得ないです。

森角 今までのコンペと雰囲気を変えるのであれば、図面で勝負するようなテーマもよいですね。

小堀 アイデアコンペなので、間口はなるべく広げておくべきだと思います。テーマは多様にとらえることができるようにして、敷地や使用する材料を指定するのはどうでしょうか。

平田 その視点から考えると、たとえば「丸い部材を使った家」はどうでしょう。丸い部材をどのように組み立てるかということも考える必要があるのですが、具体的な形状や施工プロセスまでを問うフレームになります。

小堀 「自分でものをつくる」ということをテーマにするのはどうでしょうか。イメージが大量に簡単に生成できてしまう今、より確かなのは自分が手を動かしてつくれるものかもしれません。どうやったら自分が目指す家を自らつくることができるのかを考えると、提案も自分ごとにとらえることができます。

堀部 「電気を使わない家」がテーマの時は面白い提案が集まりました。あの時は環境問題も絡め、少し制約したテーマにしようという議論がありました。それを踏襲して「最小限住宅」を考えてもらうのはどうでしょうか。昨今の世界情勢も踏まえ、何を最小限とするかから考え、われわれが普通だと思ってることが、若い応募者にとってはそうではないことやその逆も発見できると、そこに未来の建築の方向性を見ることができそうです。

森角 誰もが目を背けられない社会問題や環境問題をテーマにするのはよいですね。われわれもそういった問題には常に関心をもって取り組んでいます。固定観念に囚われない柔軟な発想ができるアイデアコンペであれば、目の覚めるような解決の糸口を見出すことができるのではないかと思います。

小堀 「住み継ぐ家」というテーマはどうでしょうか。3代くらい先の世代のことまで見据え、どんな家が今あるとよいのか考えるテーマです。現在は住宅の寿命が短く、1世代が住めればよいという短期的な目線でつくられています。ナフサショックなどまさに今現在進行形の課題もあり、これからの時代の家を考えることに通じます。



青木 たとえば「石油を使わない家」なども考えられますね。その場合には材料だけでなく輸送にも使えないので、どうするとよいか応募者も勉強するでしょうし、科学的な視点も期待できそうです。

夢の素材でできる家



平田 設計に1から10まで制約が設けられているとして、そのうちのひとつの制約を外してみると急にまったく違うものができるという可能性はあると思うのです。大事なのは、何かを外す時点で、そのほかの条件は理解して受け入れなければならないので、技術や科学的な視点が置き去りになるわけではなく、自分の想像力を少し別の方向に向けることができるということです。

堀部 世界の水上都市では船の上で暮らしている人びとがいますが、彼らの家は地震力を受けないことや風圧に任せて漂うことによって独自の発展を見せていますよね。荷重は浮力に影響するので必然的に最小限住宅にも繋がる発想です。

森角 地中や海中など、これまで人間が積極的に住もうとは思わなかった場所で家を考えるともっと広がりのある提案になりそうですね。

青木 夢のある提案を期待したいので、プラス思考になるような未来を見据えるテーマはよいですね。こんな場所に住めたら、こんな素材があったら、こんなことができる、というような。今はまだ実現可能ではなくても想像を未来へ飛ばすことで自由な発想ができるのではないのでしょうか。

平田 「夢の素材でできる家」というのはどうでしょうか。「夢の素材」なので、現時点では存在していなくてもこんなものがあつたらよいという素材の特性や特長などを設定して、それを使う家を考えるというテーマです。

堀部 かなり非科学的な提案が多くなりそうですね。

平田 将来的に技術が発達して、想像していたものが現実になるという可能性を考えることに繋がると思います。素材を開発するという技術的な発想や、その素材がどのような特性をもつのかという科学的な視点や現在の素材との比較なしにしては語れませんし、そういったことを置き去りにせず設計できるテーマなのではないかと思います。



八田 未来のことを想像する前向きなテーマですね。ただ堀部さんが指摘されたような懸念もあるので、それぞれが選んだ素材に関しての設定がしっかり欲しいです。また、その素材のポテンシャルを引き出した設計をすることも重要です。青木 とてもよいテーマだと思います。このコンペはイメージ画像だけではなく、2次審査に進んだ案には模型の提出もあるので、素材の特性やつくり方など具体的な部分は自ずと見えてくるはず。小堀

社会が困窮していて、石油や建材もどんどん値上がりし、選択可能性が少ない状況の中で、見落としてきた原材料や、今までは建材としては注目されていなかったが、実はポテンシャルがある資源を見つけるというのも夢の素材ですね。少し視点を変えると、これまで見えていなかったものも発想できるのではないのでしょうか。

堀部 夢の素材もさまざまなとらえ方があるということですね。たとえば漆にはすごい力があることに目を向けたり、大きな環境の循環の中にある茅葺きを見直すとか。現在に立脚しながら今ある素材のスケールや特性などを変えてもいい。それは現在の分析にもなります。

平田 大事なのは、素材の特性がほんの少し変わることで、今あるものとはまったく異なる建築のかたちが生まれるかもしれないということです。その面白さが応募者に少しでも伝わるとよいですね。現在と未来は地続きなのであまりに突拍子のない素材を提案しても逆に面白くなく、評価されないはず。司会

それでは、今回のテーマは「夢の素材でできる家」にしたいと思います。



応募者に期待すること

八田 まずはテーマ文を素直に受け止めてください。未来を想像して、どこに住むか、誰と住むかといった発想からも素材に向き合って、「夢」という言葉から感じる希望や明るさを含んだ前向きな提案を期待しています。

森角 「夢」という言葉にはワクワク感や殻を破ったというイメージがあると思います。そのようなこれまでにない建築を予感させる提案を見たいです。

小堀 たとえば空調エネルギーや環境に着目するエンジニアリングの視点で身の回りの素材を見直してみると、さまざまな分野を絡めた発想ができるかもしれません。もしくは、捨てられているものも実は可能性のあるものとして見ることで、あの素材が実はすごいという発見が生まれるかもしれません。設計の楽しさが伝わる提案を期待しています。

平田 模型でも素材やつくり方を少し変えるだけで新しい表現ができるようになったという経験をした人も多いはず。それをもう少し大きいスケールにしたらどうなるか、模型と同じようにつくりながら考えていくと面白い提案が生まれるのではないかと思います。そして、さまざまな材料特性や技術的な知見を調べてみるとこれまで見えていなかった可能性が発見できるはず。堀部

期待していることをひと言でいうと、「科学でワクワク」。これを外さないでほしいです。伝統的な自然素材をもう一度見直してみようという提案も出てきてほしいです。科学の発展によってどんどん新しいものが開発されても、やっぱり自然素材が未来を支えるものだという視点もあるでしょう。夢の素材はこんな身近にあるということにも気づくよいチャンスだと思います。

青木 未来の素材を提案するだけではかたちに説得力は生まれません。なぜその素材を選んだのか、それはどのような価値をもつのかをきちんと示してください。そこからさらに発想を展開させた家のあり方を示していただきたいです。素材の新たな価値を見出すことも重要ですし、その素材を起点としてこれまでにないかたちを創造することも設計の楽しさだと思います。その萌芽を感じる提案を期待しています。

(2026年4月2日大和ハウス工業東京本社にて。文責：本誌編集部)

主催者代表 大和ハウス工業 村田誉之副社長から応募者に向けて

社会情勢は厳しいですが、やはり住宅の設計は楽しいものです。「夢の素材でできる家」は、その楽しさを追求できるようにと考えていただいたテーマです。それは固定観念を取り払ったところに生まれてくるかもしれません。「夢」という言葉がもつ意味を考え、若い皆さんならではの柔軟な発想を活かしたワクワクするような明るい提案を期待しています。また、2次審査会はこれまでと異なった対話型の開かれたものにします。ご期待ください。